

3

仮定法表現の基本パターンとはどんなもの？

ここまでのところで、事実とかけ離れたことに言及するときには、その現実との「へだたり」感覚を伝えるために、ネイティブは時制を古い方に1つずらすことを考えました。

加えて、ifがあろうとなかろうと、話し手から見て、事実とかけ離れていることを取り上げた表現はみな、「仮定法表現」と呼ぶことについても考察できました。

基盤となることが整ってきたので、ここで、**if節＋主節** という仮定法のもっとも基本的なパターンについてまとめてみたいと思います。

皆さんがよくご存じの、「～としたら（if節）、～だろう（主節）」というパターンのものです。

さっそく、これから3つの場面に分けて考えてみることにしましょう！

独自の呼び方ですが、今後、現在の事実^{に反することは}「**現・反**」、過去の事実^{に反することは}「**過去・反**」、これから先の「ありえないこと／ありそうにないこと」は、「**非現実的未来**」と、それぞれを呼ぶことにしますので、どうぞご了承ください。

では、その3つに分けて、それぞれの基本パターンを確認していきますね。

1. 「現・反」(「もし今～としたら、～だろうに」) の場合

If S' Vp ～, S would V ～.

例：If I **knew** her number, I **would call** her.

もし電話番号を知っていたら、彼女に電話するだろうに
(知らないので電話できない)。

would 以外に、could や might も使われます。should は
まれです。

could V だと「V できるだろうに」、might V だと「V する
かもしれない」といったニュアンスになります。以後は、
would だけを代表として取り上げます。

主節の中で助動詞の過去形を用いるのは、if 節で取り上げて
いる事柄が非現実的なものなので、生の助動詞を用いて話
し手の判断を表すのがはばかれるためです。話し手の判
断を控えめに表す過去形が用いられていることを、どうぞ
見逃さないでください。

2. 「過去・反」(「もしあのとき～としたら、～しただろう に」) の場合

If S' had Vpp ～, S would have Vpp ～.

例：If I **had been** hungry, I **would have eaten** something.

もしおなかがすいていたなら、何か食べただろうに (すい
てなかったので食べなかった)。

主節が、助 + have Vpp となっているのは、話し手の思い

1 a と the ってどっちがう？

では最初に、a について考えてみましょう！ a の感覚とは、簡単に言うと、どんなものなのでしょう。

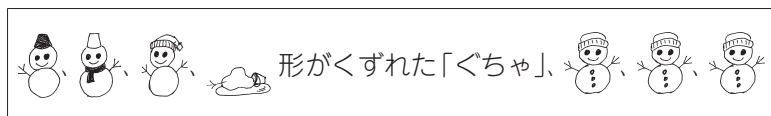
a の感覚 は、「one, two, three ～と数えるときの **one の感覚**」と言えるでしょう。なぜなら、a という語は an から生まれた語で、その同じ an から one も生まれているからです。

ですから、**a と one は、同じ「親」から生まれた「きょうだい分」**と言えるわけです（そういえば「1/1つの」は、フランス語でも un、スペイン語でも uno といい、英語の an によく似ていますね）。

では、「one, two, three ～と数えるときの **one の感覚**」とは、具体的に、どんなことを表しているのでしょうか。それを、いっしょに考えてみましょう！

1. 「one, two, three …と数えるときの one の感覚」には、「区切りや境界の感覚」が含まれています

たとえば、次のようなもの（雪だるま）を数える場面を考えてみてください。



いかがでしょうか。1、2、3…と数えて、「あっ」と思ったのでは
ありませんか。この「ぐちゃ」はどうしよう、いったい数える
べきだろうか、と悩むにちがいありません。

このように、aの感覚、つまり「one、two、three～と数える
ときのoneの感覚」には、**ちゃんと1個のものとして意識され
るという「区切りや境界の感覚」**が関係していることが、まず
わかるでしょう。そうです。**数えるためには、境界や輪郭がき
ちんと感じられることが大切**なのです。

2. 「one、two、three…と数えるときのoneの感覚」には、 「同種のいろいろ感覚」が含まれています

ふたたび、次のようなものを数える場面を考えてみてください。

トラ猫、三毛猫、シャム猫、**秋田犬**、黒猫、ペルシャ猫

いかがでしょうか。やはり、1、2、3と数えて、「あっ」と思っ
たのではないのでしょうか。ものを数えるときには、自然にある種
類や領域を意識して、それに属するものを、たとえその種類内で
あれこれちがいはあれ、1、2、3、と数えていくことがわかります。

このように、「one、two、three～と数えるときのoneの感覚」
には、**同種を意識して、その中で様々に異なるいろいろなも
のを数え上げていくような、「同種のいろいろ感覚」**が存在し
ているのです。